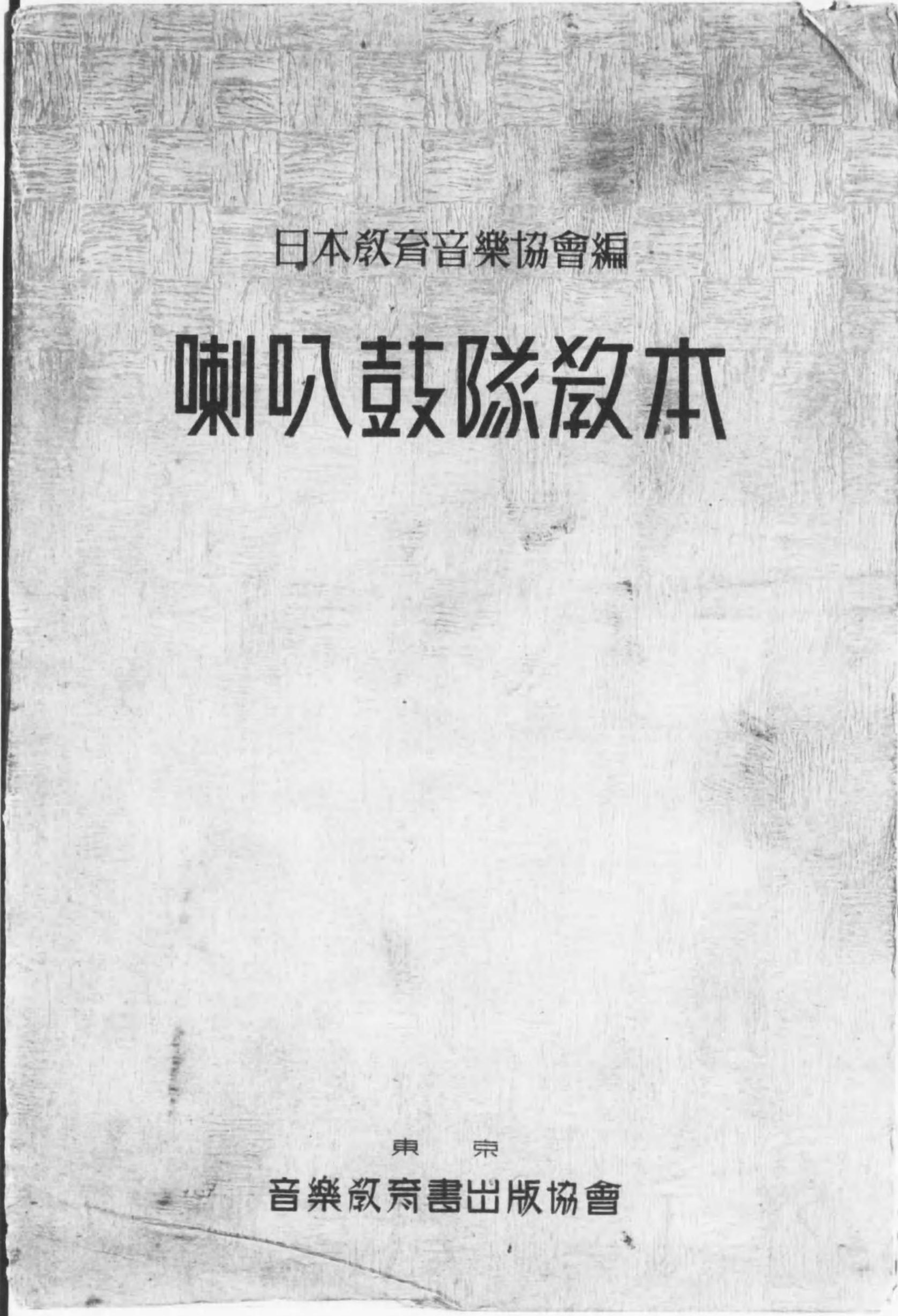
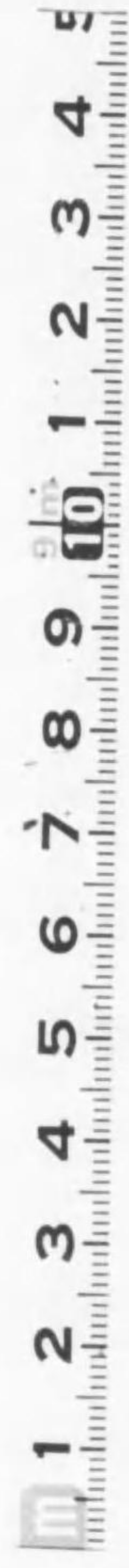




始



日本教育音樂協會編

# 喇叭鼓隊教本

東京

音樂教育書出版協會

持270  
44



編 會 協 樂 音 教 育 本

喇 隊 鼓 教 本



東 京

音 樂 教 育 書 出 版 協 會



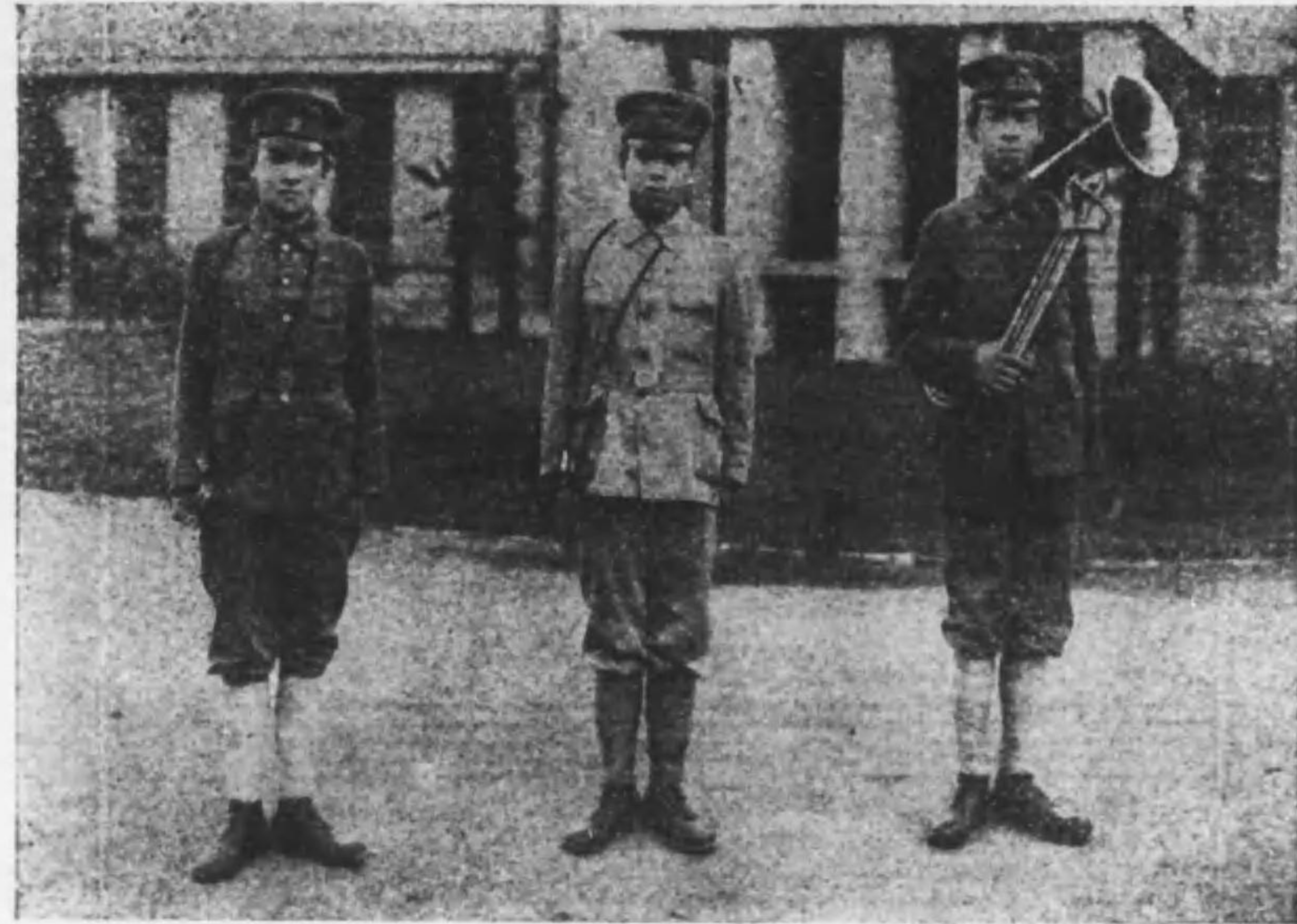
## 目 次

<p><b>第一章 喇叭の發音法</b>.....1</p> <p>全音符と二分音符の練習.....4</p> <p>四分音符.....5</p> <p>八分音符.....5</p> <p>附點二分音符.....6</p> <p>附點四分音符.....6</p> <p>附點八分音符の奏法.....7</p> <p>八分音符と十六分音符.....7</p> <p>切分音.....8</p> <p>三連音符.....8</p> <p>綜合練習.....12</p> <p>速度標語.....15</p> <p>數字による速度記號.....16</p> <p>發想記號.....17</p> <p>標 語.....17</p> <p><b>第二章 太鼓の部</b>.....18</p> <p>小太鼓.....18</p> <p>撥の持ち方.....18</p> <p>小太鼓の打ち方.....19</p>	<p>基礎の打ち方.....19</p> <p>(1) 一つ打ち.....19</p> <p>(2) 二つ打ち.....19</p> <p>(3) 三つ打ち.....20</p> <p>(4) 四つ打ち.....20</p> <p>(5) 五つ打ち.....21</p> <p>(6) 七つ打ち.....21</p> <p>(7) 九つ打ち.....22</p> <p>(8) 押手打ち.....21</p> <p>(9) 十一打ち.....22</p> <p>(10) 十三打ち.....23</p> <p>(11) 磨り打ち.....23</p> <p>(12) 二つの飾り打ち (i).....24</p> <p style="padding-left: 2em;">三つの飾り打ち (ii).....24</p> <p>省略記法.....25</p> <p>綜合練習.....26</p> <p>磨り打ちの強弱打方練習.....27</p> <p>太鼓の張替及保存に就て.....28</p> <p>大太鼓の撥の持ち方並に打ち方.....28</p> <p>シンバルの奏法.....29</p> <p>樂器の手入法.....30</p>
--	--

樂典

第一章	
第一節 譜表	31
第二節 加線	31
第二章	
第一節 音部記號	31
第二節 音名並音名の位置	32
第三章	
第一節 音符休符	32
第二節 音符並休符の歷時	33
第三節 休符の位置	34
第四節 附點音符	34
第五節 附點休符	35
第四章	
第一節 縱線	35
第二節 小節	36
第三節 拍子	36
第四節 拍子記號	36
第五節 結合線	37
第六節 三連音符	37
第七節 拍法	37
第八節 拍の性質	38
第五章	
第一節 延長記號	39
第二節 終止記號	39
第三節 反復記號	39
第四節 音符並に小節の略記法	40
第五節 速度數字	40

第一章 喇叭の發音法

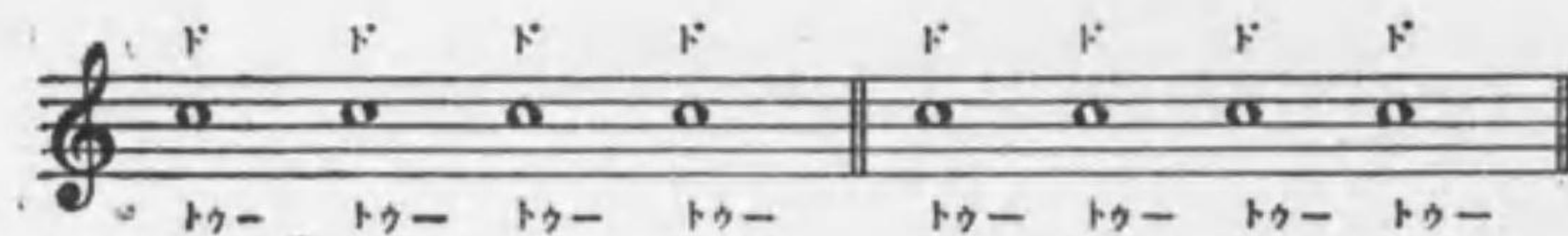


不動の姿勢



構へた姿勢

一般に喇叭の吹奏に無経験の者に吹奏させると、何んでも強く吹くが、舌を用ひないで吹き出す其の響は、概してハ長調の高い(ド)音(中央ハ音のオクターヴ上の)である。従つて最初此(ド)音より發音練習をするのが、最も適當である。



高い(ド)音は、喇叭の吹き口に上下唇を平均に當て、舌は唇より僅かに出し、唾液を喇叭の吹き口に吹込む氣持で之を繰返せば、必ず發音される。音は常に(トゥー)と吹込む。

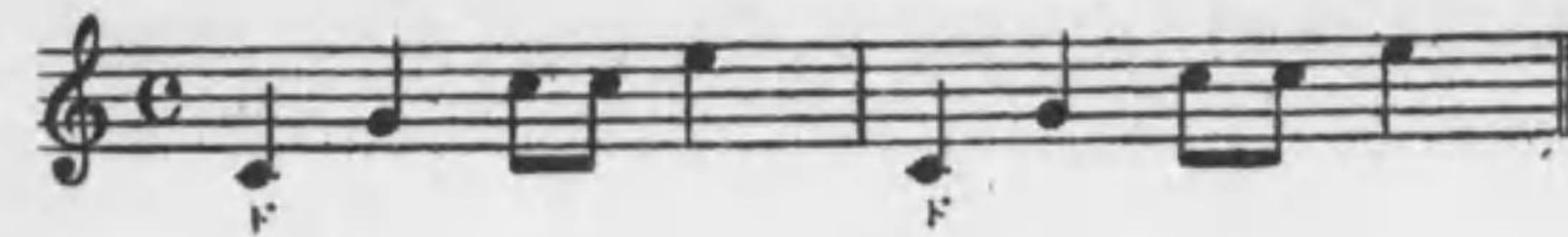
高い(ド)音に次いで出易いのは、その下の(ソ)音である。



(ソ)音の發音法は、上部唇に喇叭の吹き口を稍壓し氣味に當て、下唇は少し浮せて(ド)音の如くして少しく弱く吹込むのである。

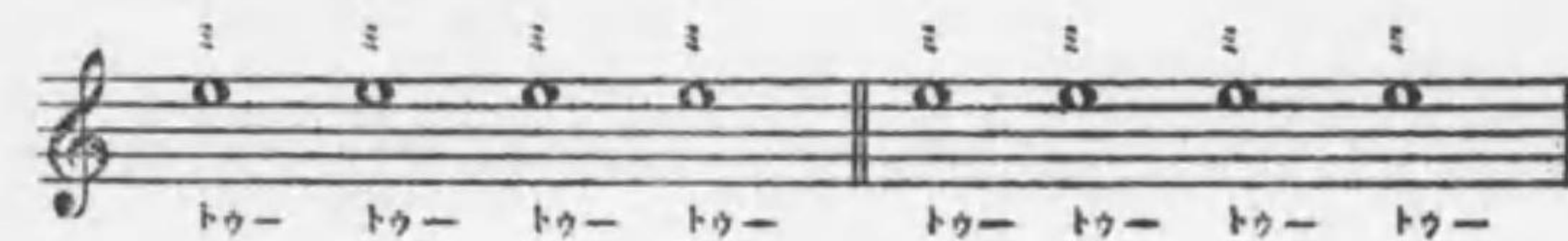
低い(ド)音は(ソ)音と稍似た發音法であるが、上唇を壓して、下唇が完全に振動し得る様にし、喇叭の朝顔を上方に向けて、喇叭の吹き口の下方に吹込む様に努めれば、必ず完全な(ド)音を發音することが出来る。

茲に發音上特に注意を要する事は、小喇叭、中喇叭の低い(ド)音は兩唇を稍多く開き、舌先を兩唇外に出して吹き口に當て、上唇を押し下唇を自由に振動し得る様にして、重く(トゥー)と吹き口の下方に吹込めば、完全に低い(ド)音を發音し得るのである。大喇叭の(ド)音は小喇叭並に中喇叭の(ド)音の發音法とは全く反對で、先づ吹き口で下唇を押し、上唇を自由に振動し得る様にして、舌を稍多く唇の外に出し、吹き口の下方に(トゥー)と重く吹込に發音し得る。低い(ド)音は行進曲等には全く用ひられてゐないが、禮式曲君が代の曲のめば完全最初に用ひられてゐるから、吹奏する場合は特に注意を要する。



上例の(ド)音は頗る嚴肅且壯重な感と與へる音であるから、常に完全に發音する事に努めなければならない。

(ミ)音の發音法は高い(ド)音を發音する唇より尙少しく狭め、遠方に迄達するやうな元氣を以つて、吹き口の上部に吹込むのである。



以上で四個の音を發音し得られるのであるから、連續せる發音練習に移ることとする。



發音練習をする場合は、常に吹出しを鋭く強大に發音し、だんだん力を減じ、弱く細くして音を自然に > のやうに終らせるのである。音符の下の數字は、拍子を示す。'印は息をする所で、息は口の兩端或は鼻で適當に吸ひ、出來得るだけゆつくり拍子を取つて練習するがよい。

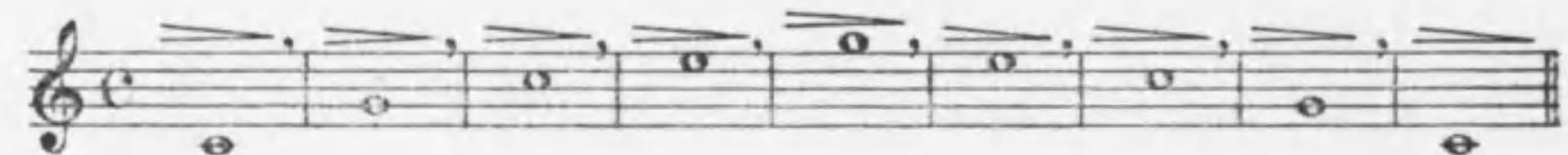
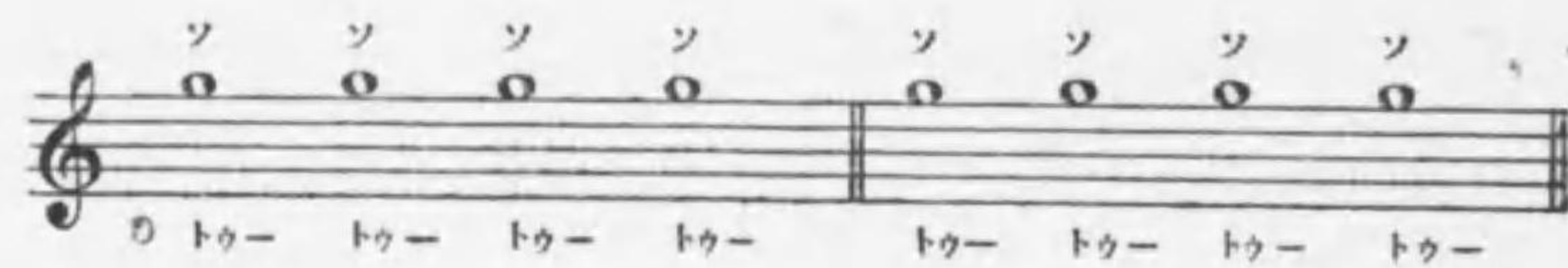




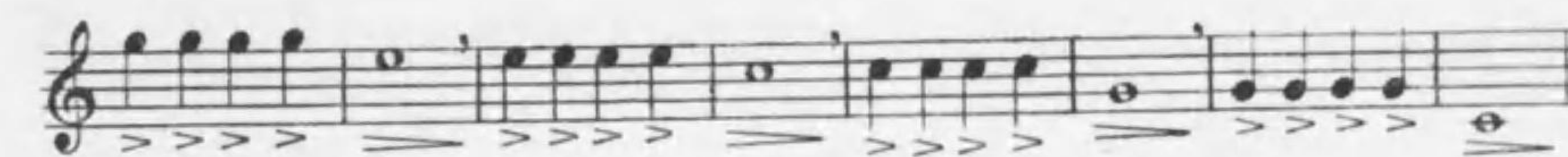
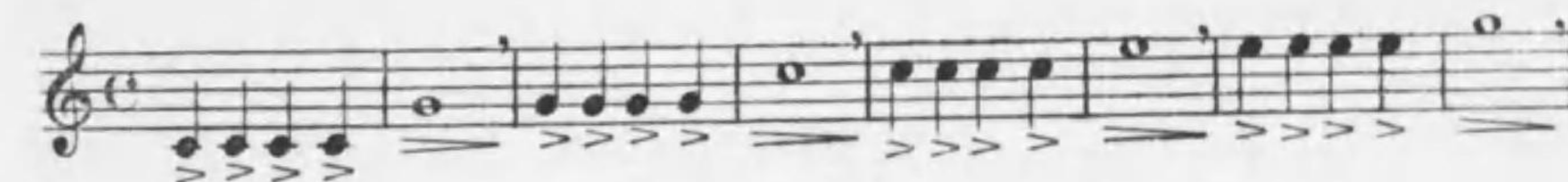
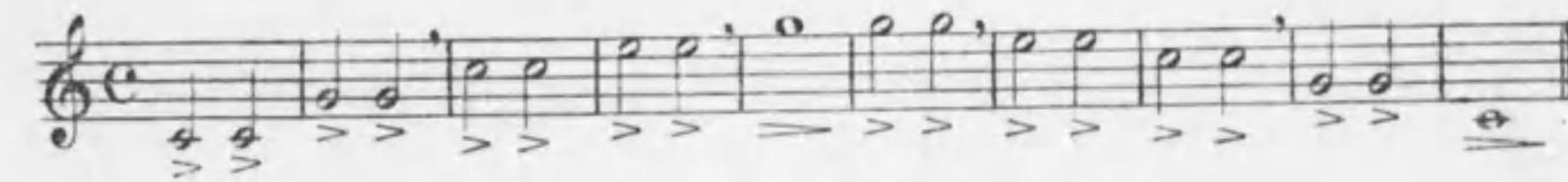
全音符と二分音符の練習。二分音符の各音を充分鋭く強く發音する。



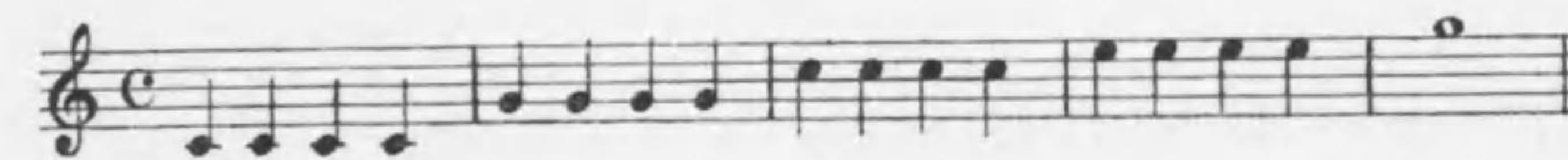
高い(ソ)音の發音法は、兩唇をせばめ舌先を薄くして吹口の上部に最も鋭く、宛も天に向つて自己の激潮たる意氣を示さねば止まない元氣を以て、吹込むものである。



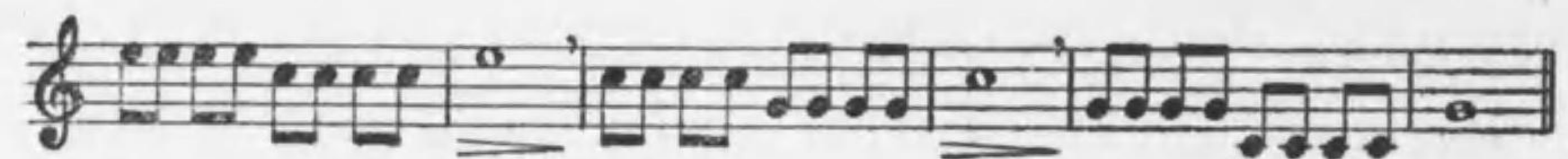
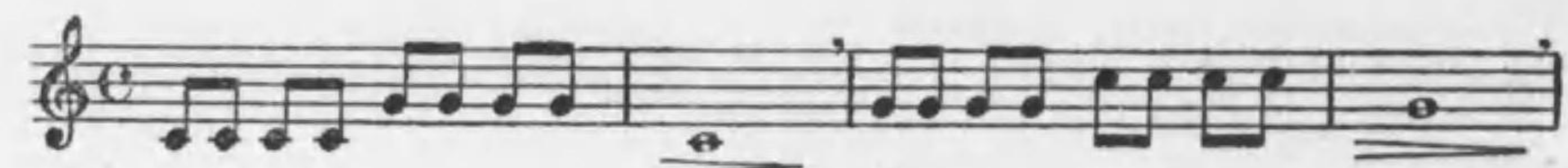
各二分音符にアクセントをつけて吹奏する事。



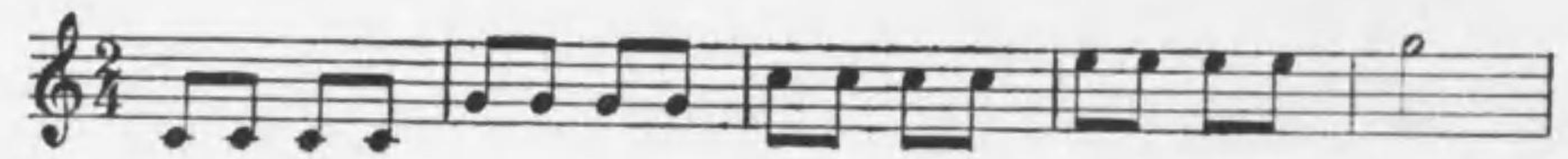
四分音符の練習は速さをゆつくりとし、各音にアクセントを付けて、音をきれいに出す様に努めること。



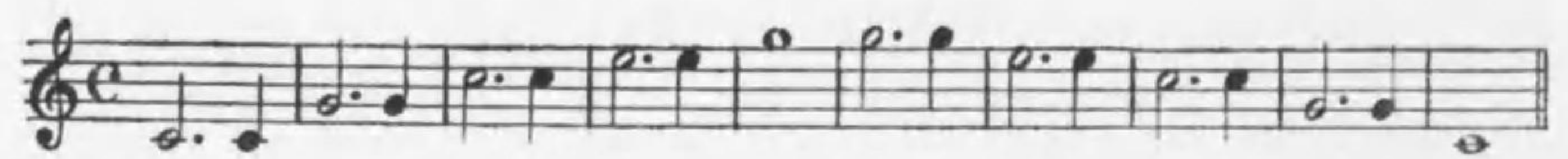
八分音符は各音を短かく、アクセントをつけて一音一音を切離す様にし、二個宛を一拍に數へて奏するのである。



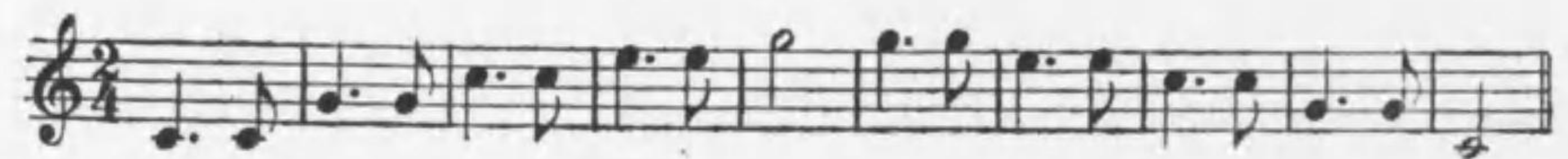
八分音符の練習は兎角速度がはやくなり勝ちであるから、ゆつくり練習するのである。



附點二分音符

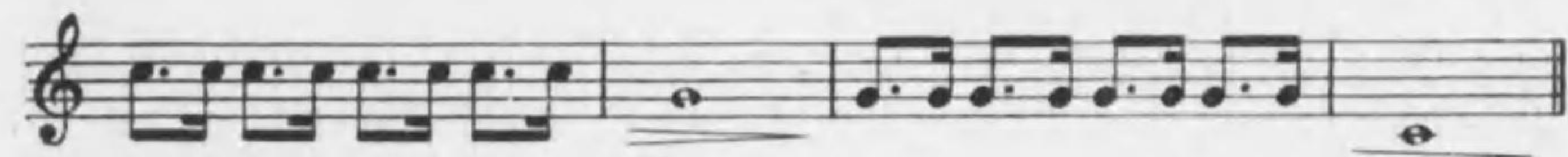


附點四分音符

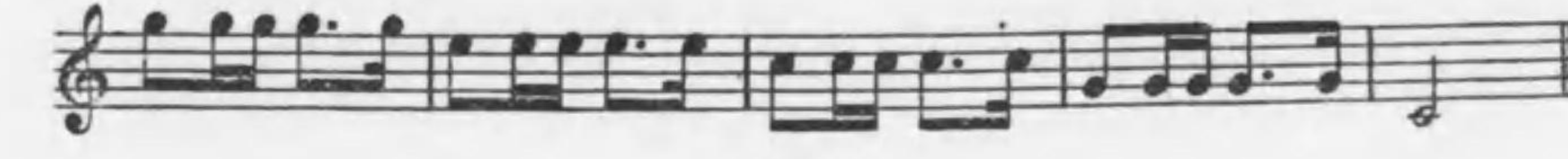
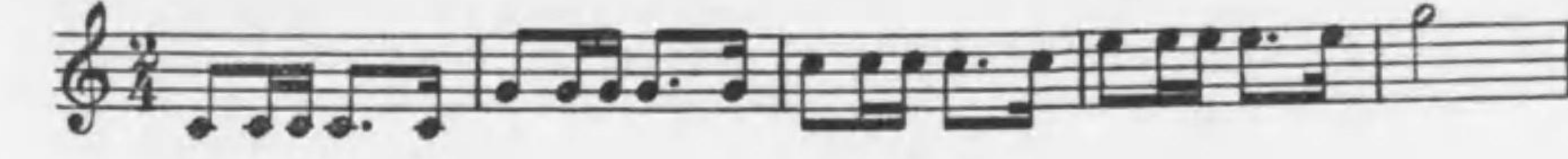
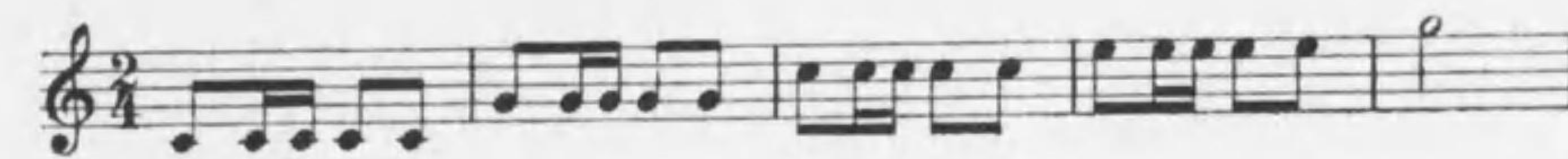
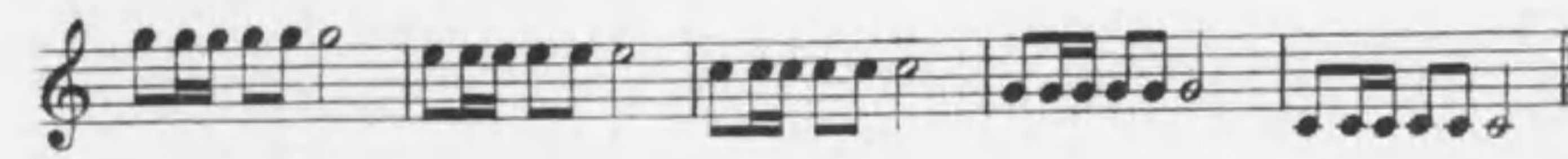
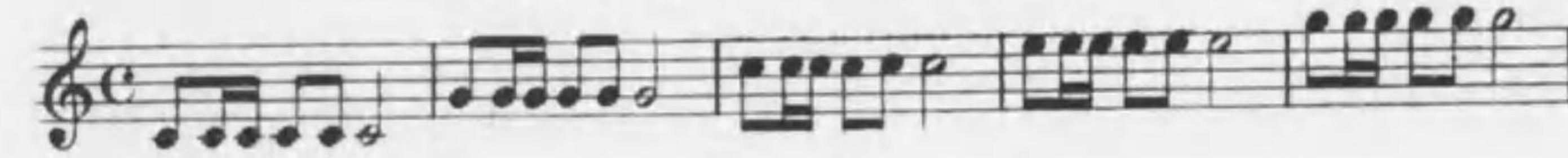


附點八分音符の奏法

附點八分音符にアクセントを付けて奏する事を忘れてはならない。



八分音符と十六分音符



### 切分音

切分音とは下例に示した様に、四拍子の第二拍と第三拍とを合して一音としたものを云ふのである。中間にある二分音符は、特にアクセントを付けて吹奏する。

### 三連音符

三連音符は三個の音を一拍に奏するのである。アクセントを第一の音に付けて、三個の音の長さの平均するやうにせねばならない。

十六分音符の三連音は第一の音にアクセントを付け、第二、第三の音は舌で(タタタ)と云ふやうに吹込むのである。最初是を明瞭にする爲めにゆつくり練習し、次第に正しい速さに練習するがよい。



四分の三拍子に於ては、第一拍を特にアクセントを付けて奏する。

綜合練習

### 速度標語

總て楽曲は或速度を以つて演奏される。楽曲の速度は標語又は記號に依つて指示されるのである。

速度を示す標語を、速度標語といふ。その多くは楽曲全體の速度を示すものであるが、楽曲の一部分の速度の變更を示すものもある。

極めてゆるやかなもの (楽曲全體の速度を示す標語の中)

Largo	(ラ ル ゴ)	幅廣く最も緩かに。
Adagio	(ア ダ チ ォ)	緩徐に。
Lento	(レ ン ト)	アダチオより遅く。
Andante	(ア ン ダ ン テ)	緩く。

中庸のもの

Andantino	(ア ン ダ ン テ ィ ー ノ)	中庸の速さに。 (アンダンテより稍々早く)
Moderato	(モ デ ラ ー ト)	同上。

速いもの

Allegro	(ア レ グ ロ)	速く且活潑に。
---------	-----------	---------

最も速いもの

Vivo	(ヴィヴォー)	活潑に速く。
Vivace	(ヴィヴァーチェ)	快速に。
Presto	(プレスト)	急速に。

漸次速くなるもの

Accelerando (accel.)	(アツチュレランド)
Stringendo (string.)	(ストランヂェンド)

其の部分より直に速くするもの

Piú allegro	(ピウ・アレグロ)
Piú presto	(ピウ・プレスト)
Piú animato	(ピウ・アニマート)
Piú mosso	(ピウ・モッソ)

漸次速度を減ずるもの

Ritardando (rit.)	(リタルダンド)
Rallentando (rall.)	(ラレンタンド)

其部分から速さを減ずるもの

Piu lento	(ピウ・レント)
Meno mosso	(メノ・モッソー)

一時變更した速度を本来の速度に戻す爲めには、次の標語を用ひる。

a tempo	(ア・テムポ)	本来の速さに。
Tempo Prima	(テムポ・プリマ)	最初の速さに。

數字による速度記號

樂曲の始に見受ける M.M. ♩ = 114 の如き記號は、即ちメトロノーム(速度を計る機械)による速度を示したもので、鐘の上端を 114 の目盛の所に置き、その一振の時間を以て四分音符一個を奏することを示すのである。

M.M. は Mälzel's Metronome の略である。

Adagio	M.M. ♩ = 54 - 50
Moderato	♩ = 90
Andante	♩ = 60
Allegro	♩ = 114 - 140
Presto	♩ = 135 - 160

發想記號

強弱を表すもの

<i>pp</i>	(Pianissimo)	(ピアニッシモ)	最も弱く
<i>p</i>	(Piano)	(ピアノ)	弱く
<i>mp</i>	(Mezzo piano)	(メツプピアノ)	稍弱く
<i>mf</i>	(Mezzo forte)	(メツプフォルテ)	稍強く
<i>f</i>	(Forte)	(フォルテ)	強く
<i>ff</i>	(Fortissimo)	(フォルティッシモ)	最も強く
<i>fp</i>	(Fortepiano)	(フォルテピアノ)	強く直ちに弱く
<i>sf</i> 又は <i>sfz</i>	(sforzando)	(スフォルツァンド)	特に強く (目立つやうに)
<i>fz</i>	(forzando)	(フォルツァンド)	
<i>cresc.</i>	(crescendo)	(クレツシェンド)	漸次強く
<i>decresc.</i>	(decrecendo)	(デクレツシェンド)	漸次弱く
<i>dim.</i>	(diminuendo)	(デイミヌーエンド)	同上

標語

Brillante	(ブリルランテ)	華麗に
Maestoso	(マエストーソ)	嚴肅に
Con brio	(コン・ブリオ)	勇ましく
Con fuoco	(コン・フォーコ)	熱烈に
Con moto	(コン・モート)	感動して
Risoluto	(リゾルト)	熱心に

## 第二章 太鼓の部

### 小太鼓

小太鼓は、右肩から左脇下へ斜に革紐を掛け、革紐の鉤に吊すのである。此の場合、小太鼓に附属する股當は、左腿で支へて、行進する際動揺しない様にするのである。



不動の姿勢



構への姿勢

### 撥の持ち方

左手の撥は、拇指と人示指の間に深く支へて、薬指と小指を軽く屈して薬指の上に撥を乗せ、人示指と中指を成るだけ屈けない程度にし、打つのを主に手頭と拇指の活動に依らせるのである。右手の撥は、人示指の第一関節と拇指の腹で持ち、他の三指を添へておればよい。

要するに両手頭は常に軟かにして、太鼓を打つ際は撥の反動を巧に利用して、撃奏技術の進歩を圖るのである。そして両手の撥の先は、常に小太鼓の中央三センチメートル位の圓内を打つのである。

### 小太鼓の打ち方

喇叭鼓隊に於ける小太鼓は、非常に重大な役を負ふて居るのであるから、鼓手として基礎的打ち方を理解する必要上、茲に概略を記す。

練習する場合（右左）両手の撥の力が平均に、且規則正しく太鼓を打つ様に心掛けるのが必要である。

初心の際には太鼓を打つと、兎角技術の進歩途中に於て、太鼓の皮を打ち破る恐があるから、出来得れば先づ総練習豫定期間の三分の一に相當する間は、板を打つて練習をなし、後に太鼓を打つ様にするのが、最もよい方法である。

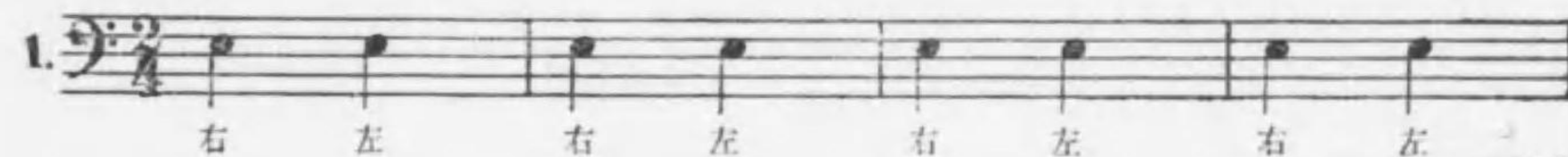
此の場合は、大體小太鼓を吊つた高さに板を置くのがよい。

### 基礎の打ち方

- |              |          |
|--------------|----------|
| 1. 一つ打ち      | 2. 二つ打ち  |
| 3. 三つ打ち（左の手） | 4. 四つ打ち  |
| 5. 五つ打ち      | 6. 七つ打ち  |
| 7. 九つ打ち（右の手） | 8. 押手打ち  |
| 9. 十一打ち      | 10. 十三打ち |
| 11. 磨り打ち     | 12. 飾り打ち |

### (1) 一つ打ち

両手の撥に力を平均に加へて、最初緩徐に、追々速度をはやめて練習を繰返す。



### (2) 二つ打ち

二つ打ちは先づ右手で二つ打ち、次に左手で二つ打つ。之を規則正しく両手で平均した力を以て、最初は緩やかに段々急速に練習する。

2.   
 3.   
 4.

(3) 三つ打ち

三つ打ちは左手で二つ打ち、右手で一つ打つ。又右手で二つ打つた場合は左手に止るのである。

5.   
 6.

(4) 四つ打ち

7.   
 8.

(5) 五つ打ち

五つ打ちは最初打ち下す其の手に依つて止るのが常である。技術の進歩するに従ひ、初め緩徐に漸時急速に力を加へて激打し、最高潮に達して急止し、更に再び斯かる練習を繰返し行ふのである。

9.   
 10.

(6) 七つ打ち

初め左手から打ち、右手で終る様にして練習する。

11.   
 12.

(7) 九つ打ち

九つ打ちは、右手から打ち始めるのが、普通である。

13.   
 14.

(8) 押手打ち

右手の撥を高く上げ、左手の撥は右手より稍低い所に置き、左手の撥を軽く打ち、直ちに右手の撥を強く打つ事に依り、右手の押手打ちが出来るのである。又左手の押手打ちは、右手の場合と反対にすればよい。

15.   
 左右 左右 左右 左右 左右 左右 左右

16.   
 左右 左右 左右 左右

17.   
 左右

18.   
 左右 左右 左右 左右

19.   
 左右 左右 左右 左右 左右 左右 左右 左右 左右 左右 左右

20.   
 左右 左右 左右 左右 左右 左右 左右 左右

(9) 十一 打ち

21.   
 右 左 右 左 右 左 左 右 左 右 左 右

22.   
 右 左 右 左 右 左 右 左 右 左 右 左

(10) 十三 打ち

23.   
 左 右 左 右 左 右 左 右 左 右 左 右 左 右   
 右 左 右 左 右 左 右 左 右 左 右 左 右

24.   
 右 左 右 左 右 左 右 左 右 左 右 左 右 左

(11) 磨り 打ち

25.   
 右 右 左 左 右 右 左 左 右 右 左 左 右 右 左 左

26.   
 右 右 左 左 右 右 左 左

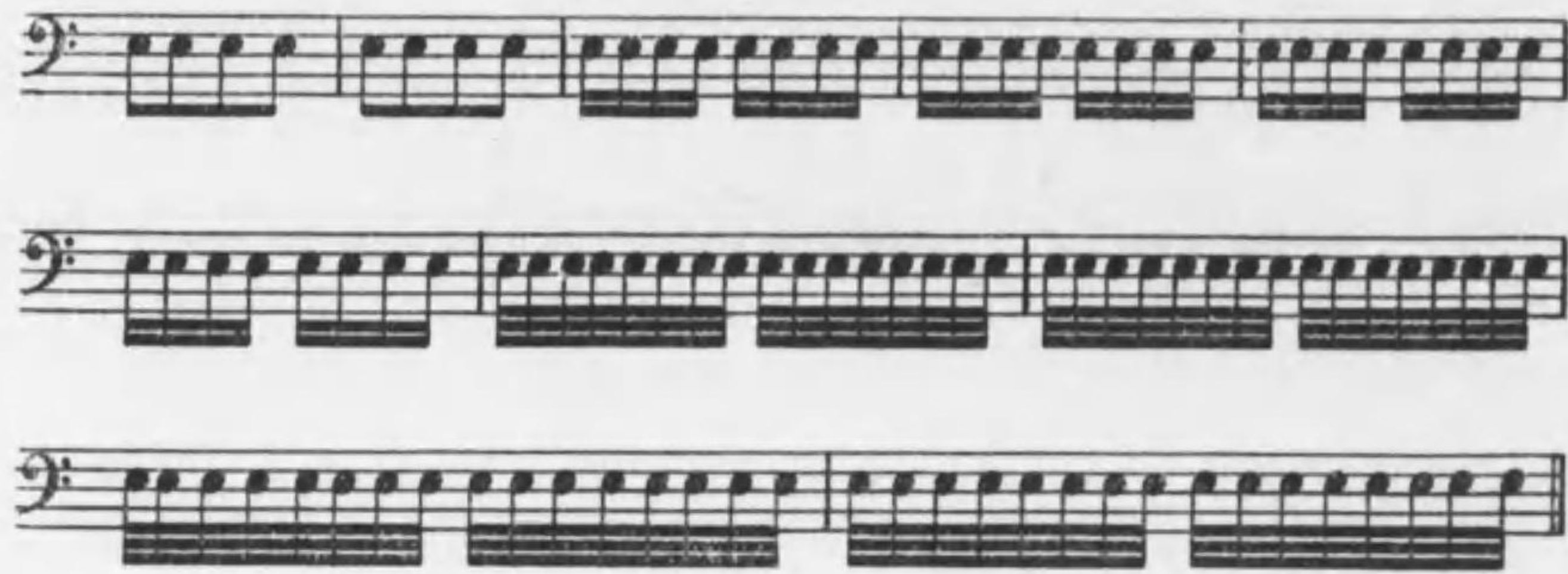
27.

28.   
 右 左 右 左 右 左 右 左

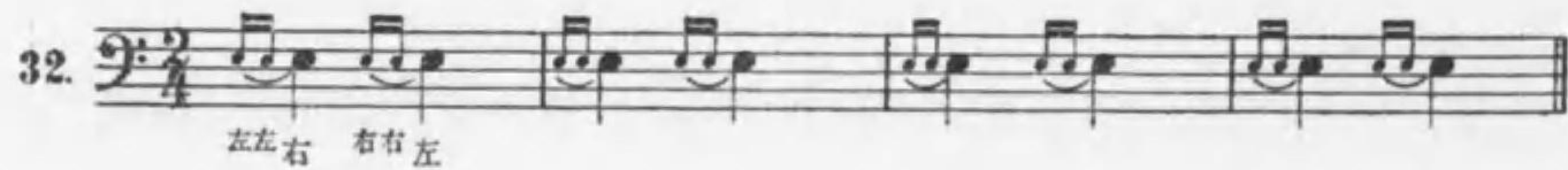
29.   
 右 左 右 左

I.   
 II.

30.



(12) 二つの飾り打ち (I)



三つの飾り打ち (II)



以上の二つ、三つの飾り打ちの場合は、飾りの音よりは主音を特に強く打つのである。即ちアクセントを主音につけるのである。



省略記法

楽曲中短い音符を多く記す代りに、長い音符に、ある記號をつけて表すことがある。又同一の小節を多く記す代りに、數字及記號を以つて表すことがある。かゝる方法を省略記法といふ。





綜合練習

The left page contains ten staves of musical notation. The first staff is in bass clef with a common time signature (C). The second staff is in bass clef with a common time signature (C). The third staff is in bass clef with a 2/4 time signature. The fourth staff is in bass clef with a common time signature (C). The fifth staff is in bass clef with a 2/4 time signature. The sixth staff is in bass clef with a common time signature (C). The seventh staff is in bass clef with a 6/8 time signature. The eighth staff is in bass clef with a common time signature (C). The ninth staff is in bass clef with a common time signature (C). The tenth staff is in bass clef with a 6/8 time signature.

The right page contains ten staves of musical notation. The first staff is in bass clef with a common time signature (C). The second staff is in bass clef with a common time signature (C). The third staff is in bass clef with a 3/4 time signature. The fourth staff is in bass clef with a common time signature (C). The fifth staff is in bass clef with a 2/4 time signature. The sixth staff is in bass clef with a 3/8 time signature. The seventh staff is in bass clef with a common time signature (C). The eighth staff is in bass clef with a 12/8 time signature. The ninth staff is in bass clef with a common time signature (C). The tenth staff is in bass clef with a common time signature (C).



磨り打ちの強弱打方練習



太鼓の張替及保存に就て

小太鼓並に大太鼓の皮は、何れも打つ方の皮を稍分厚のものにし、裏皮を表皮より薄いものを選んで張るが良い。斯くすれば音響も良く、皮の破れる恐れも比較的少ないのである。

新に皮を張り換へる場合には、十五分乃至二十分間位水に浸し、水より掲げて、張る前に多小皮を手で伸ばし、然る後張る。張つた上は、再び皮を手で平均に伸ばし、螺旋を充分緊めて置き、皮が乾くに從つて螺旋を弛めるのである。

皮を新に張り換へる際、及び平常使用する際は、常に全部の各螺旋を平均に緊めるのである。斯くすれば皮の保存上宜敷く、從つて生命も長く且つ音響もよい。

使用後は緊めた螺旋を再び弛めて置くのである。

サイド ドラム	Side Drum	(英)
クライネ トロムメル	Kleine Trommel	(獨)
ペティット カース	Petite Caisse	(佛)
ピッコロ タンブーロ	Piccolo Tamburo	(伊)

大太鼓の撥の持ち方並に打ち方

大太鼓の撥は、先より三分の二位の所を、拇指と中指で軽く握り、他の指を添へて居るのである。此の際餘り強く握ると、太鼓を打つた場合音響悪しく、重苦しく、輕快潑瀾な感じが得られないから、此の點は特に注意を要する。

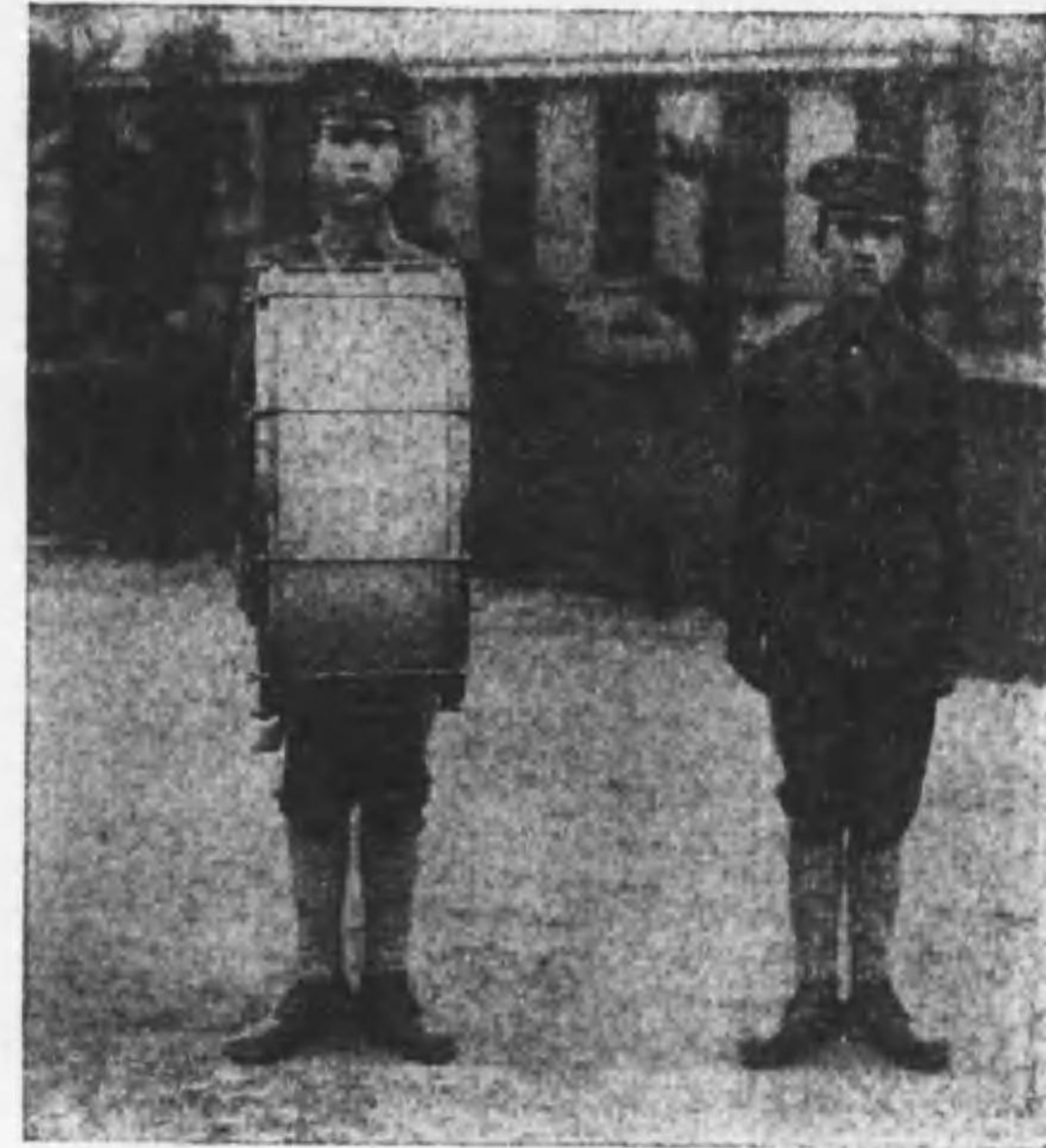
手頭は柔かくして、太鼓を打つた刹那、撥をはやく皮より離す様に努める。

大太鼓の練習に當つては、撥を持つて姿勢を正し、大太鼓を吊した如く考へて、前述の注意を守り、二三日間打奏の練習を爲す。斯の如き練習の要領を大體會得した後、大太鼓の實奏練習に移るのである。又大太鼓を打つ場合は、常に皮の中央を打つがよい。

シンバルの奏法

喇叭鼓隊は、行進して演奏する事が多いのであるから、別にシンバルの奏者を撰び、獨立せしむる方が効果的である。

シンバルの支へ皮に手を差し込み、其の手を約半分程廻して、拇指と他の四指で支へて皮を握るのである。



不動の姿勢

鳴らす場合に、双方のシンバルを餘り完全に打ち合せると、音が籠つて明朗を缺くから、  
 少々中心をそらして両手のシンバルを打合せ、充分効果を發揮する様にする。但しシンバルは、  
 直径普通二十五糎位から以上であるのが音の響がよい。

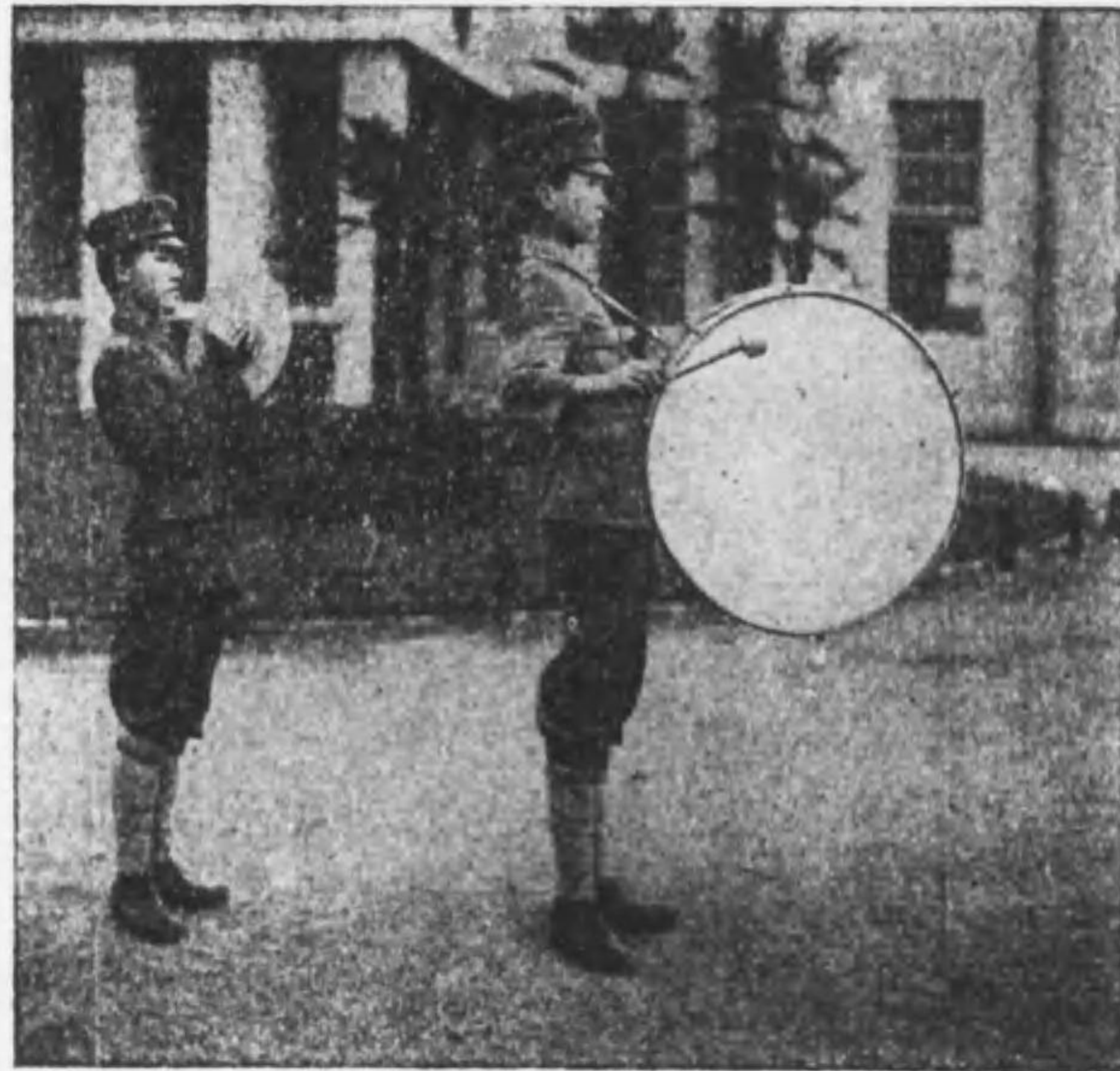
室内で大太鼓にシンバルを附屬させて奏する時は、右手の撥と左手のシンバルの音響が  
 渾然融和する様、特に練習を要するものである。

### 樂器の手入法

樂器は常に光澤を保たしめるのがよい。餘り錆びると音響が悪くなり、且つ美しさを損  
 ふから、平常練習後は内部の水分を完全に除き、外部は乾いた布片で唾液や手脂等の附着  
 せるを拭つて置く方がよい。

餘り錆びた場合は、鏝入のピカールかアモールを木綿の布片に付けて能く磨擦して錆を  
 去り、然る後他の布片にて充分拭ふのである。

六ヶ月に一二回位水か微温湯を通して、内部に臭氣が發せぬ様注意することが必要であ  
 る。磨く際は飾り紐を汚さない様にする。



構へた姿勢

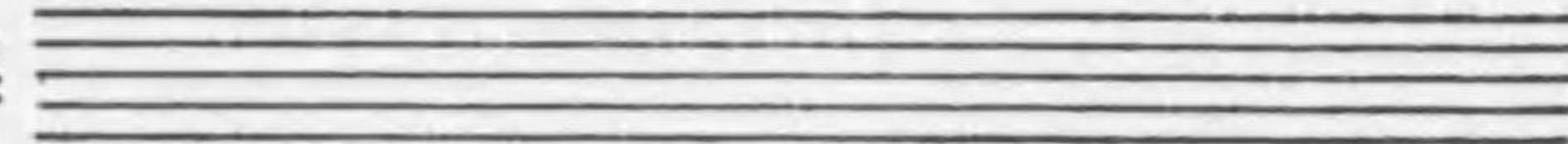
## 樂典

### 第一章

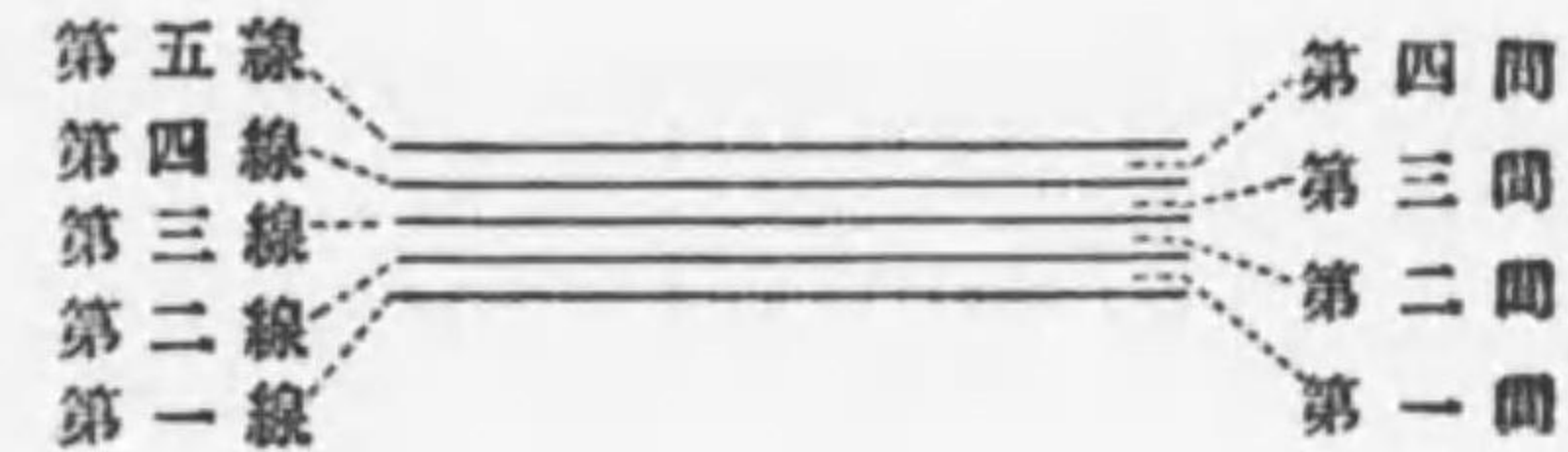
#### 第一節 譜表

譜表は同長同間隔の、五本の水平なる直線、即ち五線と音部記號とから成り立つ。

#### 五線

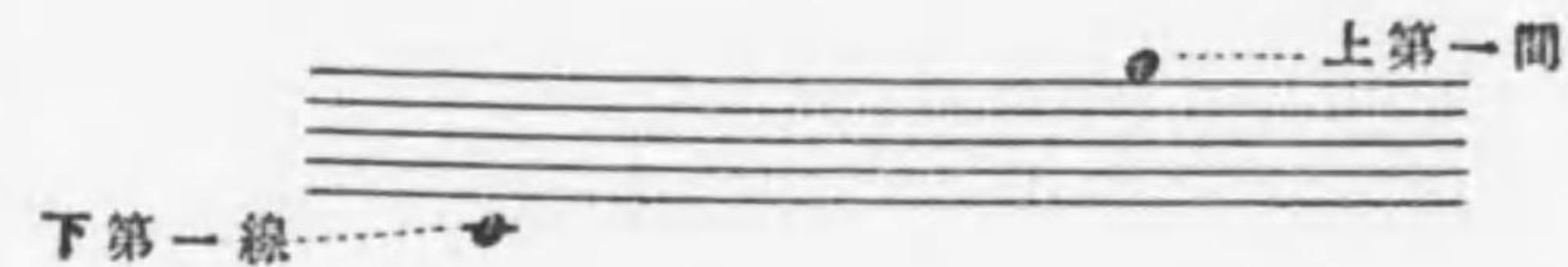


譜表の線及線間は、何れも音符を記して音の高低を示すに用ひられ、下から上に數へて  
 第一線から第五線、第一間から第四間に至る。



#### 第二節 加線

譜表の線上及び線間合せて九度の位置の外に、尙高低の音を記すには、第一線の下方と、  
 第五線の上方の位置を使用する。尙その上に高低の位置を必要とする時には、譜表の上下  
 に臨時に短線を増設してこれを使用する。この短線を加線といふ。



### 第二章

#### 第一節 音部記號

音部記號は譜表上に於ける音名の位置を決定するものである。音部記號は譜表のはじめ  
 に置かれるもので、普通に用ひられるものは次の二種である。

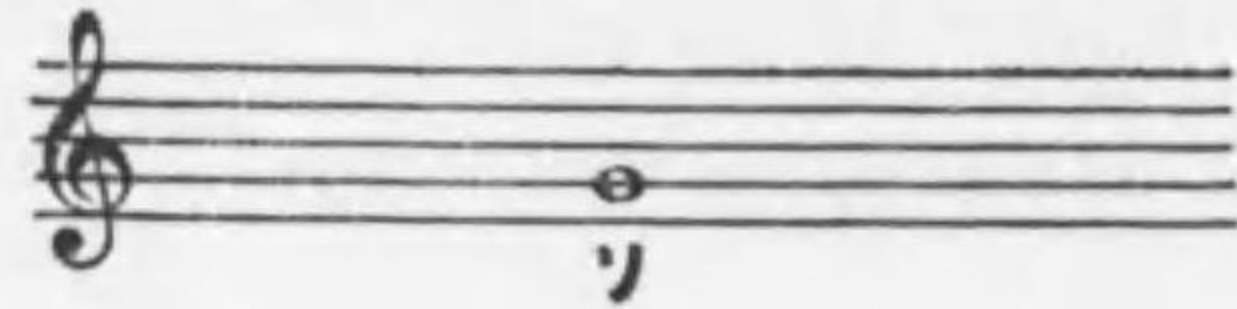


普通にト音記號と呼ばれる。

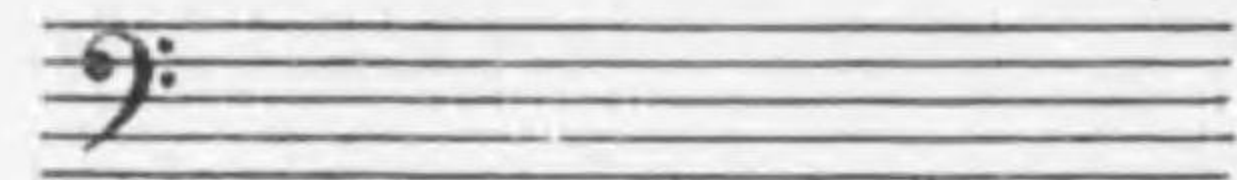


普通にヘ音記號と呼ばれる。

ト音記號は五線の第二線を卷くが如くに記し、この小渦内に十字形の生ずるところが、この記號の主要位置で、喇叭に於いてはソの發音に當るを以て、ソの音部記號ともいふ。



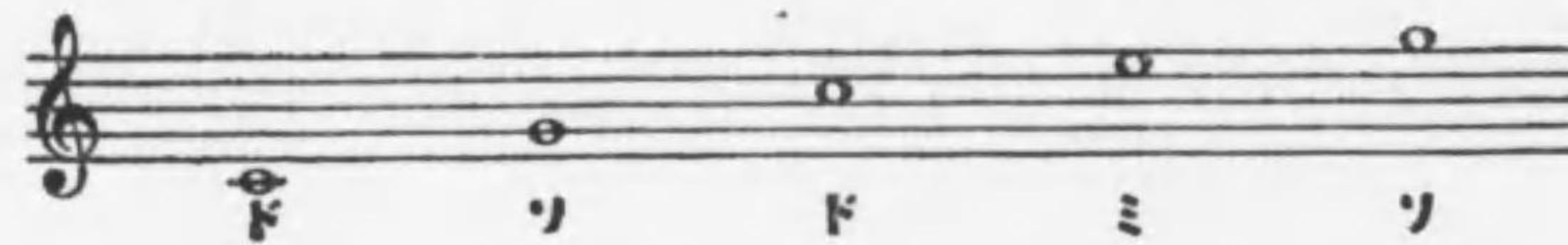
ヘ音記號は五線の第四線に置かれるもので、この記號の右側の二點間の中心部が、此の記號の主要位置である。此の記號は喇叭鼓隊に於いて、大太鼓、小太鼓に限り使用される。



## 第二節 音名並音名の位置

喇叭に要する音は高低五個の音で低音より順を追ひ ド ソ ド ミ ソ の音名を附す。此の音名は、譜表上に一定の位置を占め音階を形成する。

今、全音符にて示せる五箇の音名並にその位置を示せば、下圖の如し。



## 第三章

### 第一節 音符 休符



音符は譜表上に記して、音の長短と高低とを表すに用ふるものである。音符は符頭、符尾、鉤の三部分、或はその一部より成立するものである。

普通用ふる音符の名稱、形狀及歴時は下記の通りである。

名稱	形狀	歴時
全音符	○	四歩
二分音符	♩ 又 ♪	二歩
四分音符	♫ 又 ♩	一歩
八分音符	♮ 又 ♪	半歩
十六分音符	♯ 又 ♩	四分ノ一歩
三十二分音符	♯ 又 ♩	八分ノ一歩

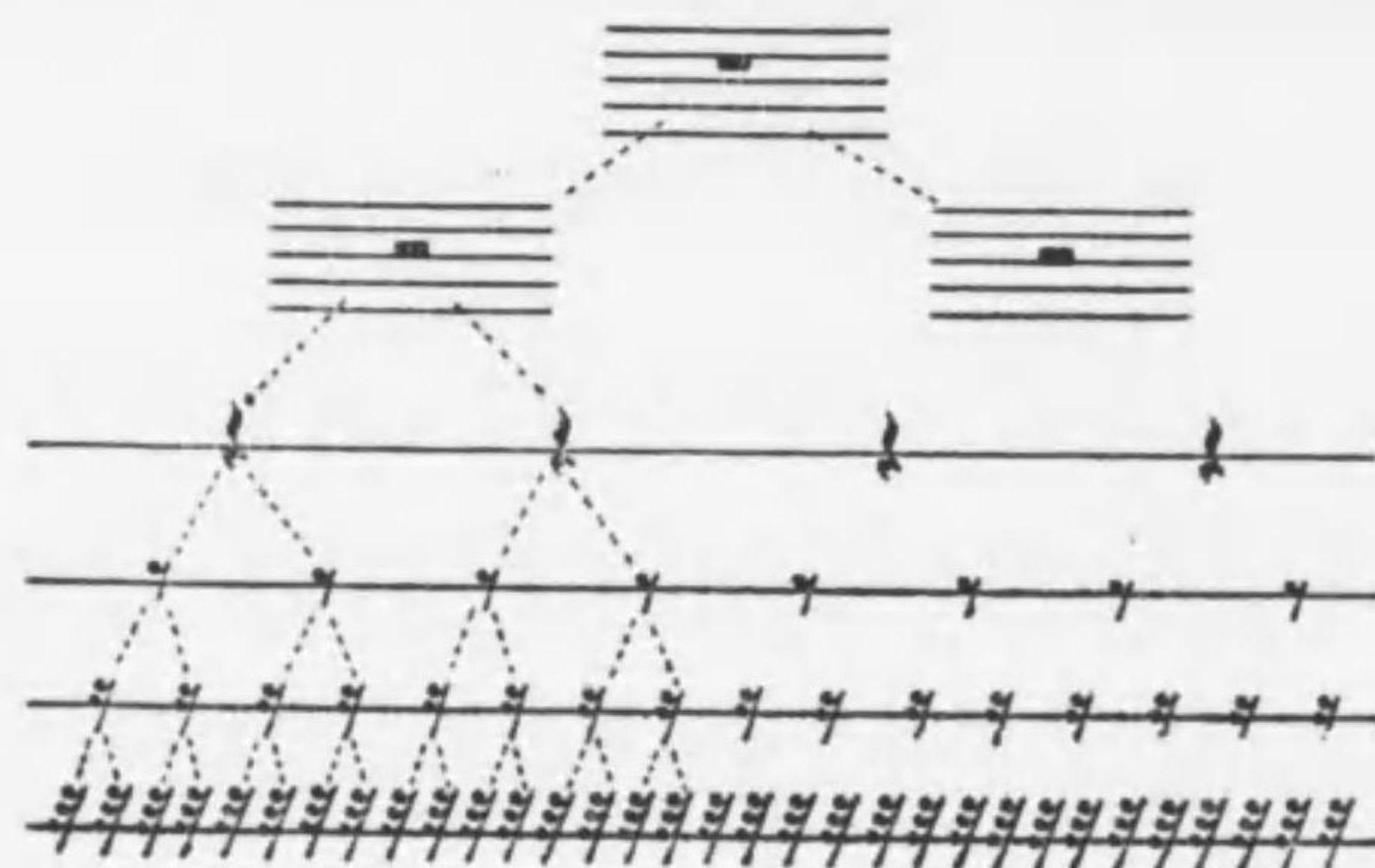
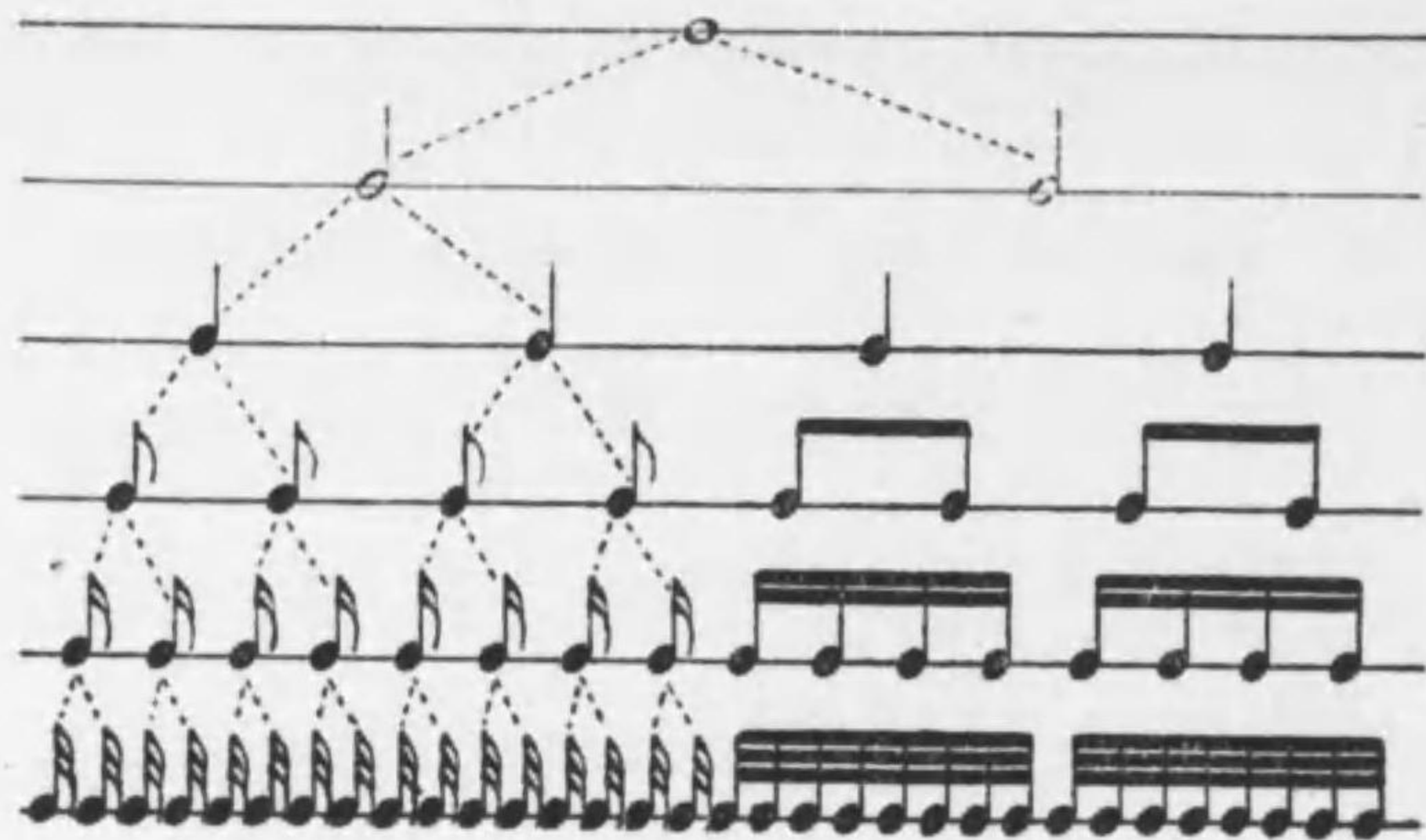
休符は樂曲の進行中、音の休止する箇所を譜表上に表す符號である。その名稱、形狀及歴時は普通用ひられるもの下圖の通りである。

名稱	形狀	歴時
全休符	—	四歩
二分休符	—	二歩
四分休符	—	一歩
八分休符	—	半歩
十六分休符	—	四分ノ一歩
三十二分休符	—	八分ノ一歩

註。喇叭鼓隊は常に行進して吹奏する場合が多いから、各音符並休符の歴時は歩數を以て示すが記憶上便利である。依てここに歩數を基準として表示したのである。

### 第二節 音符並休符の歴時

音符の長さ、休符の休止時間を歴時といふ。その比較下圖の如し。



### 第三節 休符の位置

休符は普通譜表上一定の位置に記される。即ち全休符は第四線の下部に、二分休符は第三線の上部に記されるが如し。



### 第四節 附点音符

音符の右側に小点を付けたものを附点音符といふ。附点の音長はその付けられた音符の

二分の一である。従つて附点音符の音長は原音符の音長の一倍半となる。附点音符は原音符の名稱に附点の二字を加へてその名稱とする。

鼓隊の喇叭譜には附点四分音符と附点八分音符が主に使用せられるれども、参考のため他のものも記せり。

名 稱	形 状	歴 時
附点全音符	○・ = ○ + P	六 步
附点二分音符	P・ = P + P	三 步
附点四分音符	P・ = P + P	一 步 半
附点八分音符	P・ = P + P	一 步ノ四分ノ三步
附点十六分音符	P・ = P + P	一 步ノ八分ノ三步

### 第五節 附点休符

音符に於けるが如く休符もまた、その右側に小点を附し、原休符の二分の一の長さを増加す。従つて其の歴時は原休符の一倍半なり。

名 稱	形 状	歴 時
附点全休符	—・ = — + —	六 步
附点二分休符	—・ = — + P	三 步
附点四分休符	P・ = P + P	一 步 半
附点八分休符	P・ = P + P	一 步ノ四分ノ三步
附点十六分休符	P・ = P + P	一 步ノ八分ノ三步

## 第 四 章

### 第一節 縦 線

楽曲はその進行中、強い部分と弱い部分とが規則正しく交替循環するものである。譜表上でこれを等しい小部分に區劃するために、譜表を縦断する直線を用ひる。この直線を縦

線といふ。

譜表を縦断するに二本の直線を用ふる時がある。これを複縦線と稱し、楽曲の終結或は段落等に用ひられる。終結に用ひるものは右の線を太く記す。



### 第二節 小節

縦線に依つて分割せられたる小部分は之を小節といふ。各小節は同一の拍数を持ち、相當の音符又は休符が含まれるものである。



### 第三節 拍子

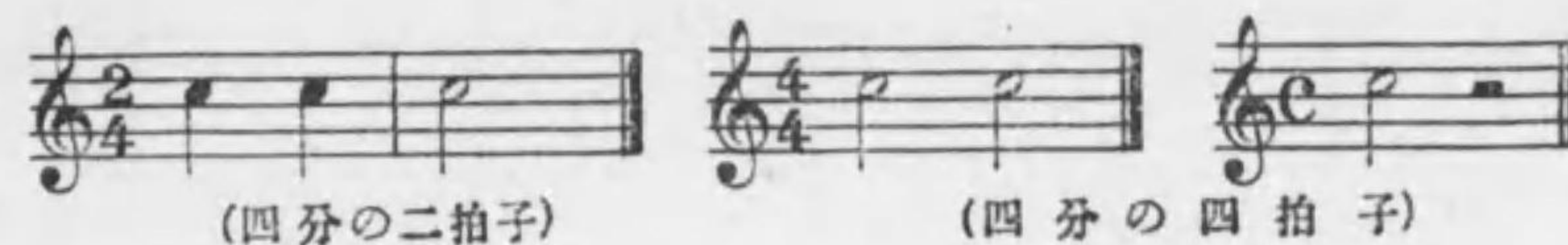
茲に 小節内の歴時 二歩なるものと、四歩なるものとあり、此の場合前者を二拍子、後者を四拍子といふ。



### 第四節 拍子記號

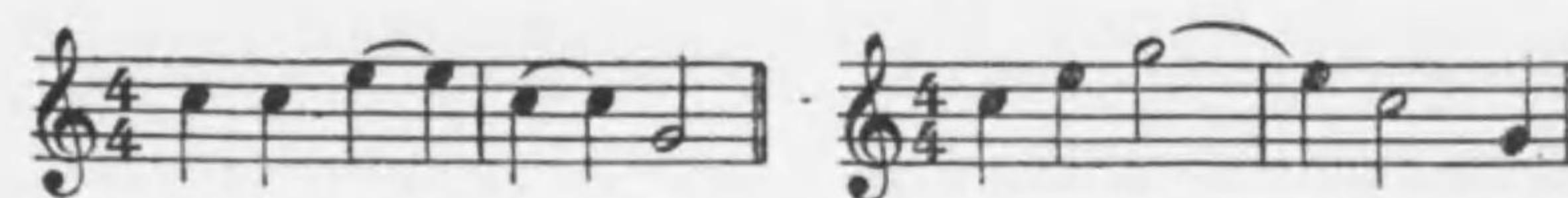
拍子記號は楽曲の初め音部記號の次にアラビア數字、又は他の記號にて表す。アラビア

數字の下の數字は一拍に數へる音符の種類を示し、上の數字は小節内の拍数を示すものである。



### 第五節 結合線

同高度の音符に弧線を附したる時は、弧線の附けられたる音符は一音符の如くに奏し、高度を異にしたる二個以上の音符に附記した弧線は、そのかゝりたる音を圓滑に奏するものである。前者をタイ記號と呼び、後者をスラーと呼ぶ。



### 第六節 三連音符

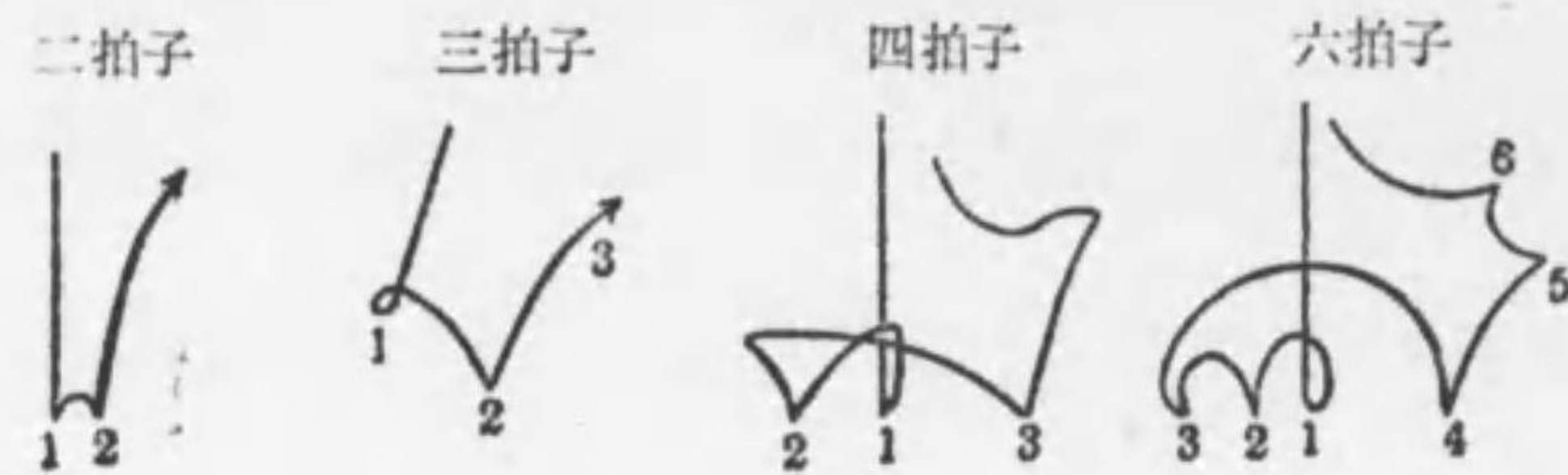
同じ歴時を有する音符三個の上方、又は下方に3の小數字を附記しあるものあり。これを三連音符といふ。例へば八分音符三個を四分音符一箇の歴時に奏するものにして、この場合は拍子の上より之を變拍子と云ひ、音符の上より三連音符といふ。



### 第七節 拍法

拍子に於て拍数を正確に數ふる方法を拍法といふ。即ち音符の歴時を正しく吹奏するために足踏みに依つて拍数を數ふ。故に二拍子にあつては一拍は左足を踏み、二拍は右足を踏み、四拍子にあつては二拍子を重複すればよい。

又多數吹奏者を齊一するために指揮者又は指導者は、手又は鞭を以て拍數を數ふると共に、音の強弱をも併せて示す。之は拍法中最も重要なるものである。(休符もまた拍數に加へられるものである)



### 第八節 拍の性質

樂曲進行の際、強拍部と弱拍部とが規則正しく交互に繼續循環するもので、之を拍子といふ。故に四分の二拍子にあつては第一拍は強拍で第二拍は弱拍である。又四分の四拍子にあつては第一拍は強拍、第二拍は弱拍、第三拍は中強拍で第四拍は弱拍である。



#### ○強弱の移動

樂曲に變化を興へるために、強弱の位置を移動させることがあるもので、之を切分法(シンコペーション)といふ。

切分法は樂曲の一小節内、又は二小節に涉つて同高度の弱拍と強拍との音を結びつけて同一の音にし、強拍と弱拍の位置を轉換させるのである。



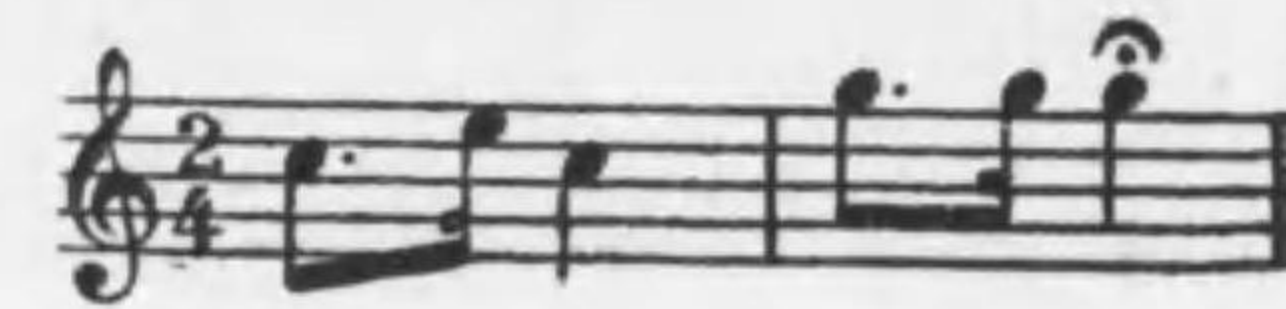
(イ) に示したる例は第二拍の弱拍と第三拍の強拍とが同一音符となつて強拍の移動した

るもの、(ロ) に示したるものは弧線によりて強拍の移動したるものを示すのである。

## 第五章

### 第一節 延長記號

音符又は休符の固有の歴時を任意に延長して吹奏する時、記號 ◌ 或は ◌ を附す。之を延長記號といふ。(通常その音符又は休符の二倍三倍延長す。)



### 第二節 終止記號

複縦線の上に延長記號と同一の記號あるときは、其の樂曲の終れることを示す。



### 第三節 反復記號

樂曲中同一の部分あるとき記譜上の煩を避けんがために、記號を用ひて記譜を略することがある。之を略記法と云ひ、此の記號を反復記號といふ。

記號は複縦線に二點或は四點を附して之を表す。



又反復される曲節が全部同一でなく、終りの部分のみ異なる時は、異なる部分のみ別に下の如く記すことがある。此の時は定められた部分を反復し、二回目は(1)の部分を超えて(2)に進むものである。



第四節 音符並小節の略記法

楽曲中音符並小節を略記する事がある。



第五節 速度數字

喇叭の速度を表すために、其の曲の初めの上部に ♩=114 ♩=66 ♩=88 等の如く、速度數字を記して一分間に吹奏すべき速度、即ち歩数を示す。



註。 喇叭鼓隊に於いて、上例 (1) は一分間に 114 歩の速度に吹奏すべきを示し、(2) は一分間に 66 歩に、(3) は 88 歩の速度に吹奏すべきを示すものである。

發 賣 所	不許	昭和十一年十二月二十日印刷 昭和十一年十二月二十五日發行
	複製	
東京市神田區錦町三丁目十一番地 音樂教育書出版協會	著者	東京音樂學校內日本教育音樂協會 代表者 乘杉嘉壽
	發行者	東京市神田區錦町三丁目十一番地 音樂教育書出版協會 正久啓
印刷者	高橋	東京市京橋區銀座西二丁目三番地 網大 增田 本葉田 正久啓 郁一治策
電話 神田 25) 〇八三三香 振替 東京 六四七七〇香	定價 金壹圓	喇叭隊本奧付



特270

44

終